

ひと

ライブラリー・オブ・ザ・イヤー大賞の図書館長

ひらが けんや  
平賀 研也 さん(54)

A3829



東京では、外車輸入販売会社の経営改革を担っていた。一人息子の小学校選びに迷っていたころ、長野県伊那市の小学校が、のびのびとした教育を実践していると聞き、親子で見にいった。日本アルプスに抱かれた大自然。人々の柔らかさ。終電で帰宅する毎日とは別の世界があった。2002年、退社し、家族で移り住んだ。

江戸時代、高遠藩があった土地の暮らしには、歴史と文化が根付いていた。ただ、その価値に住民が気づいていない。「お客さんではいたくない」と、情報通信技術で地域の活性化を進める市の委員に応募した。07年には公募で伊那図書館長に。「図書館を拠点に、ITで人々と歴史や文化をつなぎ直してみようと思ったんです」

学校や博物館に眠っていた古地図を使い、旧城下町の地図上に自分の現在地を表示して街歩きを楽しめる携帯端末用のアプリ「高遠ぶらり」を開発した。住民と一緒に歩いて街を再発見し、歴史をたどった。高遠藩内藤家の下屋敷があった縁で、東京・新宿御苑周辺の「内藤新宿ぶらり」もできた。

図書カードを作った人には地域通貨「りぶら」を発行する。図書館で使わなくなった本と交換でき、地元商店で割引券にもなる。

NPO主催の賞で今年、先進的な取り組みが「地域資源の創生」と評価された。「図書館がただの貸本屋じゃないと証明できて、うれしいです」 文・写真 斎藤智子

## 文化

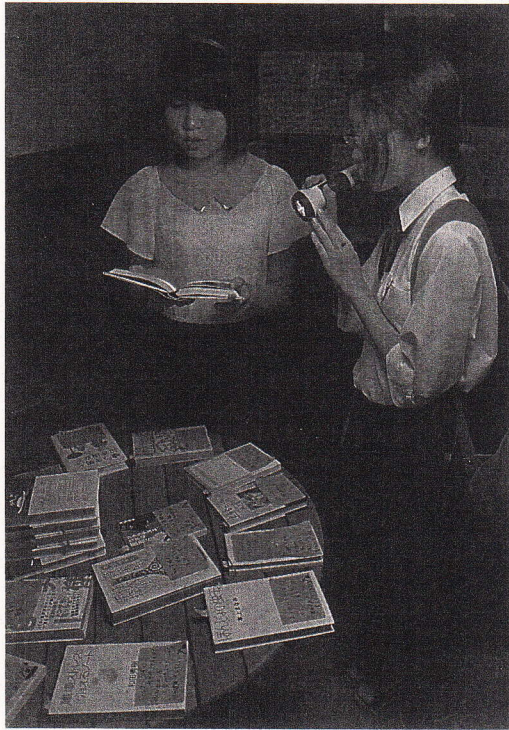
A 38209

小さな図書館  
大きな輪

個人・NPO・書店 大阪で24日サミット

個人やボランティアが立ち上げた民間図書館が各地に広がっている。そんな小さな図書館約20館が一堂に会する「第1回マイクロ・ライブラリーサミット」が24日、大阪市浪速区のまちライブラリー@大阪府立大学で開かれる。本を介して人と人をつなげてきた小さな取り組みが大きな輪に広がりつつある。

サミットは磯井純充とみみさんが集う「まちライブラリー(55)」が、知り合いの図書館や書店に声をかけて企画。磯井さんが自身もカフェや会社などに設けた本棚に本を持ち寄り、



懐中電灯を片手に本を「発掘」する学生―新潟市の「ツルハシブックス」

ん広がってきた。サミットは小さな図書館をやっていっている人たちが夢や体験を語り合い共有できる場にしたと話す。サミットで発表をするNPO「情報ステーション」は千

葉県船橋市を中心に15館の図書館を運営する。無料で会員登録ができ、1人2冊、2週間借りられる。

2006年3月、当時、大學生だった代表の岡直樹さん(29)が、船橋駅前に開設予定だった連絡通路のスペースに机を置き、「図書館を作りま

す。本を寄付してください」と手書きの紙を貼って本を募ったのが始まりだ。1カ月で1千冊集まり、同年5月に1館目が開館した。いまでは酒店やパン屋の一角も図書館に。蔵書は5万8千冊、会員は9千人まで増えた。運営は委託料や寄付などでまかない、9歳から79歳のボランティア約450人が支える。「歩いて気軽に人が集まれる図書館を増やしたい」と船橋市内に30館を目標に掲げる。

## 「発掘」し設置した地下 ■ 開館でパン屋・酒店

図書館だけではなく、変わった書店の発表もある。

新潟市西区の書店「ツルハシブックス」の地下室にある古本コーナー「HAKKUTSU(発掘)」には、寄贈された本約200冊が並ぶ。洞窟をイメージした暗闇の中、若者たちが懐中電灯を片手に読みたい本を「発掘」する。それぞれの本の帯には寄贈した人からのメッセージが書かれ、購入した若者もメッセージを残す仕組みだ。

店主の西田卓司さん(39)は「若い人、特に中学生に良い本に出会ってほしい」と、地下室は30歳以上は入室できないというルールを設けた。値段も中学生1冊100円、10代200円、20代300円だ。西田さんは「サミットでは様々なつながる取り組みを学びたい」と話す。

サミットにはだれでも参加できる。参加費1千円(交流会は別途2千円が必要)。インターネット(<http://opu.is-library.jp/567/>)で申し込み。(山田優)